
カーとのメモリー

piasu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カーとのメモリー

【NZコード】

N0812X

【作者名】

p_i a s u

【あらすじ】

カラスのカーとの切ない思い出。

「カラスのカー」

カラスのカーはいつも僕を見ている。
僕は歩けない。

天井の木目が人の歪んだ顔のように見える。
もう飽きたと一筋の涙を流す。
でも僕にはカーが居る。

カーは時を知っているのか、お昼になるとベランダにやってきてカーと鳴く。

お昼の合図だ。僕はお母さんに頬んでパンを一枚もらつ。
ベランダ面する窓を開け、カーに挨拶する。「おはよっ」僕はつぶやきパン切れをカーの傍へ投げた。

カーは首をかしげ、大きな瞳でパン切れめがけ鋭い口ばしでつづいた。

今日もごきげんだ。
僕も翼があれば飛べるのに。

僕とカーとの心の対話は世界に一つだけ大輪の華を咲かせた。
それから数日—

カーとは会えなくなつた。

僕が病氣したからだ。カーは何度もお昼に会いに来ていました。
6日目お母さんがベランダで洗濯物を乾していました。
お母さんはじつとカーを見て急いで部屋に戻りました。
部屋からはボリュームを最大のクラッシャーが聞こえます。
頭の良いカーは、気が付きました。

次の日、カーは白い小さな花を一本くわえてきました。

そして僕の開かない窓の前に置いた。

カーは大声で泣いた。

「カー 僕はココだよ。」「気が付いて」

数秒の沈黙：

「あー、僕は死んだんだ」心に熱いものが絞めつける。

カーは気が付いていた。僕の前で一声鳴き、ついて来てと言わんばかりにちょこ

ちょこ前を歩く。僕は空を見た、太陽が眩しい。

光はカーと透けていく僕に注がれる。

もう行くんだね。僕はカーを見つめ。

太陽を見た「ありがとう、カー」

僕は何処に行くのだろう?

僕は消えて行つた。

カーも一声叫び太陽に向けて飛び去つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0812x/>

カーティのメモリー

2011年10月9日15時54分発行